

胸の奥が、じわりと温かくなった。

「航平さん」

「ん？」

「甘やかしすぎです」

「まだ足りない」

「これ以上って何するつもりですか」

「同棲」

一瞬、思考が止まった。

「……今、何て？」

「一緒に住めば朝飯も夕飯もちゃんと食わせられる」

「動機がおかしいです」

「他にもある」

「何ですか」

「毎日お前と寝られる」

耳まで熱くなった。

「会社のロビーで言わないでください!」

「声小さいから聞こえない」

「私には聞こえてます!」

慌てる美月を見て、航平は楽しそうに笑った。

「冗談半分」

「半分は本気なんですか」

「ああ」

その真顔を見て、美月は嫌な予感がした。

航平は一度決めると行動が早い。

まさか本当に物件を探し始めたりしないだろうかと思ったが、その場では仕事へ戻らなければならず、深く追及できなかった。

そして翌週末。

美月は航平の車の助手席で固まっていた。

「……どこへ向かってるんですか」

「物件見に行く」

「誰の？」

「俺たちの」

やっぱりだった。

「待ってください。私、同棲するって言ってません」

「知ってる」

「じゃあ何で内見予約してるんですか」

「見るだけならいいだろ」

「それが罠なんです!」

「何の」

「気に入った部屋見せて、その気にさせようとしてるでしょう」

航平はハンドルを握りながら、少し考えるように目を細めた。

「否定はしない」

「ほら!」

「でも、決めるのは美月だ」

名前を呼ばれ、美月は少しだけ言葉に詰まった。

航平は強引だ。

しかし、本当に嫌がることだけはしない。

付き合い始めた頃から、そこだけは一貫している。

「一軒だけだから」

「本当に？」

「気に入らなければ帰る」

「契約しませんからね」

「分かった」

「絶対ですよ」

「ああ」

その返事が妙に素直だったので、逆に不安になった。

案内されたのは、美月の会社と航平の会社のほぼ中間に位置する
二LDKのマンションだった。

高層階ではないが、南向きで明るく、広いリビングには大きな窓がある。キッチンも使いやすそうで、寝室とは別に仕事部屋として使える洋室まであった。

そして、何より最寄り駅まで徒歩五分。

「……ずるい」

美月は思わず呟いた。

「何が」

「条件よすぎます」

「だろ」

「絶対私が気に入りそうなところ選びましたよね」

「当然」

航平は悪びれない。

「俺だけが気に入っても意味ない」

不動産会社の担当者が別室を確認している間、美月はリビングの窓から街並みを眺めた。

もしここに住んだら。

朝起きたとき、航平がいる。

夜帰ってきたときもいる。

休日にどちらかがソファで眠り、片方が仕事をしているような、そんな生活になるのだろう。

想像すると、不思議なくらい自然だった。

「不安？」

背後から聞かれた。

振り返ると、航平がすぐ近くに立っている。

「少し」

「何が」

「一緒に住んだら、今まで見えなかったところも見えるでしょう」

「見るだろうな」

「嫌になるかもしれない」

「それはお互い様」

「航平さん、私が思ってるより面倒くさいですよ」

「知ってる」

「朝弱いし、部屋散らかすときあるし、休日ずっとパジャマの日もあります」

「知ってる」

「なんで知ってるんですか」

「何度も家行ってるから」

「全部バレてる……」

思わず顔を覆うと、航平が笑った。

「むしろ今さら何隠すんだよ」

「乙女心とか」

「俺の前で？」

「失礼ですね」

「違う。俺はそういう美月も好きだって意味」

さらりと言われて、また何も返せなくなる。

航平は少し身を屈め、美月の目を見た。

「一緒に住みたい」

冗談ではない声だった。

「朝起きたときも、帰ったときもお前がいてほしい。忙しい日は何も話さなくてもいいし、別々のこととしててもいい。ただ、同じ家に帰りたい」

胸の奥が締めつけられる。

「……そういう言い方、ずるい」

「罠だから」

「認めるんですか」

「ああ」

航平の手が、美月の髪へ触れた。